

NewsLetter



自治医科大学地域医療オープン・ラボ

Vol.114, Jan, 2017

地域医療オープン・ラボ NEWS LETTER CRST メンバー・リレーエッセイ No.1

学会散歩: 「この発表はなぜ分かりにくいのか?」と考える

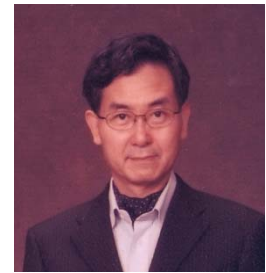
松原茂樹 (産婦人科主任教授、附属病院副病院長)

「CRST の進展」と「学会の楽しみ方」について少し書いてみる。

2010年7月にCRSTを立ち上げた。想定以上多数の先生方の賛同が得られ、2016年12月1日現在で、CRST member が合計147名、対応総数が95件、acceptされた論文は36件である。CRST 構成先生方に心から感謝申し上げます。

論文作成の「相談にのる」試みはいくつか報告されていたが、「全学あげて」論文 accept 迄を“請け負って援護する”のは世界的に例がない。未知との遭遇で苦労続きだったが、無人の荒野に行く感があった。

CRST について、僻地医学英文誌[1]へ、その側面について GP[2]および産婦人科国際誌[3]へ報告した。[1]は、publish 後2年弱で1800以上 read が記録された。平均1日2.5回読まれている。follower がでてくるか、と注視しているが、でてこない。CRST は「強い結束と信頼感」で成り立っている。そんな学問集団はあまりないのだろう。もう少し CRST 代表をさせていただき、次の方に譲りたい。次に「学会の楽しみ方」を短く書く。



若い頃は、臨床に使えるようなこと、研究の参考になりそうな発表について、その内容を「覚え込もう」としていた。理解できず、自分の力不足だと落ち込むことも多かった。

今は違う。「発表は玉石混交」「自分の研究発展には、発表聴講でなく、論文精読の方がずっと重要」とわかってきて、「今、何が話題か?」がわかれば充分だと腹が座った。発表内容が理解できなくても気にならず、むしろ、それを楽しみに変えるように工夫している。やり方は: 「この発表はなぜわかりにくいのか?」と分析してみる。

論文作成については著作中で述べた [4, 5]。「学会発表」も、「論文作成」と同じで、要は、「Question and Answer」でやる。これにつける。Question が最初に明示されていて、最後にそれへの answer (結論) が”バン”と出された発表はわかりやすい。逆に、Introduction に時間の半分を使ってしまい、研究方法の詳細を述べたて、時間切れで結論をきちんと話さず、「結論はスライドを見て下さい」で終わってしまう。そんな発表は、常にわかりにくい。

「なぜわかりにくいのか?」と分析してみる。発表者には少々済まないが、これは面白い。拍手喝采したい明快な発表にでくわしたら、なぜ分かりやすいかを分析してみる。冗談がうまかったから、声が大きかったから、ではないはずだ。発表 structure を分析してみると良い。

発表聴講での私の楽しみ方をもう1つ披露する。まず「タイトルをじっくり見て」「結論は“Aである”だろう」とあらかじめ想定しておいて発表を聞く。タイトルからは“Aである”はずなのに、“Cだった”とか、“データが出たからまずは発表した”のようなものにろくなものはない。心底伝達したい所見の場合、発表テクニックの仔細を知らなくても、“Aである”を想定させるタイトルに落ち着く。発表そのものも自然と Question and Answer 形式になる。

この2つを切り口に添加して学会発表を聴講するようになってから、学会がずっと楽しい。「なぜわかりにくいのか? or わかりやすいか?」が掴めれば、自分や医局からの発表では、そこに留意すれば良い。発表内容を「覚え込む」などどだい無理な話で、“Aである”が「理解」できれば充分だ。理解できない場合も、「な

ぜ理解できないか?」: 自分の不勉強のせいかな? 発表技法のせいかな? などと考えているうちに、懇親会の時間である。学会が退屈でなくなる。内容だけでなく、発表方法にも留意して発表を聞くと、楽しみが多くなる。

もともと、発表には天性の能力も多少関与する。通常無口なのに、人前で話させると異彩を放つ人が当医局内にもいる。そうでない、恥ずかしがり屋の通常の日本人（私もそうだが）には発表能力を磨く努力が必要だ。

文献

1. Matsubara S, Ohkuchi A, Kamesaki T, Ishikawa S, Nakamura Y, Matsumoto M. Supporting rural remote physicians to conduct a study and write a paper: experience of Clinical Research Support Team (CRST)-Jichi. Rural Remote Health. 2014;14(3):2883
<http://www.rrh.org.au/articles/subviewnew.asp?ArticleID=2883>
2. Matsubara S, Lefor AK. Right for publication. Aust Health Rev. 2016 Feb 8. doi: 10.1071/AH15245. [Epub ahead of print]
3. Matsubara S, Ohkuchi A, Minakami H. Supporting less experienced physicians to write a paper: A proposal to introduce such a system on an academic society basis. J Obstet Gynaecol Res 2016 Oct 8. doi: 10.1111/jog.13135. [Epub ahead of print]
4. 松原茂樹、大口昭英、名郷直樹. 臨床研究と論文作成のコツ。東京医学社。2011年7月1日。 pp 1-398
5. 松原茂樹。うまいケースレポート作成のコツ。東京医学社。2014年2月25日。 pp 1-286

(今回より、不定期にCRST*メンバーによるリレーエッセイをNews Letterとしてお届けします。次回3月の執筆者は、自治医科大学泌尿器科教授 森田辰男先生の予定です。)

*CRSTは、本学卒業医師の地域医療に根ざした研究や論文を支援するために、2010年7月に発足した「地域医療研究支援チーム」です。現在、147名の有志教員にご参加いただき、各専門分野における研究テーマのブラッシュアップに加え、一般的な論文作成支援にご協力いただいております。2013年4月に発足した「臨床研究支援センター」活動の一翼を担う組織として位置付けられています。

CRSTに参加し、研究支援活動を行っていただける方をひろく募集いたします。チームの活動は、主にメーリングリスト上での情報共有とディスカッションであり、会合等による時間制約はありません。チームメンバーの専門領域についてのご意見とご指導をお願いすることになります。参加登録や本企画へのご意見は、地域医療オープン・ラボ（内線 2338、openlabo@jichi.ac.jp）へご連絡下さい。

CRST ホームページ <http://www.jichi.ac.jp/dscm/CRST.html>

!! 地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集 !!

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先: 地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行]自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープン・ラボ運営委員会
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7044/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>